

非核の政府を求める石川の会 会報

非核・いしかわ

日本平和大会イン沖繩に参加して

戦争の拠点から 平和の拠点へ

尾西 洋子

那覇市で開かれた日本平和大会に石川から一人の代表の中に加えていただき、世界一危険な普天間基地、安保がみえるといわれる嘉手納基地、沖縄戦の戦跡、トーチカや慰霊碑、沖縄国際大学のヘリコプター墜落の跡地、分科会では八重山の教科書採択問題など沖縄の歴史にじかに触れてきました。

「海にも陸にも新しい基地は絶対つくらせない」との稲嶺・名護市長のあいさつに象徴された「オーラル沖繩」の県民の頭ごなしに政府が「環境影響評価書」の年内提出を企てていることに憤りを覚えます。

一二月二日に一五年目を迎えるSACO合意(米軍基地の県内たらいまわしが原則)に抗して、「この一五年前から杭一本打たせていない」辺野古を訪れ、地元のおじい、おばあの「テント村」に咲いた真っ赤な花、白い砂浜、エメラルドグリーン的大海、絶滅種の沖縄菊が風にゆらいで和ませます。その海

事務局
〒920-0848
金沢市京町 28-8
石川民医連労働組合気付
Tel 076-251-0014
郵便振替
00760-0-15689

非核 5 項目

- ① 全人類共通の緊急課題として核戦争防止、核兵器廃絶の実現を求める。
- ② 国是とされる非核三原則を厳守する。
- ③ 日本の核戦場化へのすべての措置を阻止する。
- ④ 国家補償による被爆者援護法を制定する。
- ⑤ 原水爆禁止世界大会のこれまでの合意にもとづいて国際連帯を強化する。



地元の市会議員（右）から新基地建設阻止のたたかいの歴史を聞く石川県代表团

を砂浜に分厚いコンクリートの土台と二m強の金の網のフェンスが海兵隊によって打ち込まれ、キャン・シユワブとの境界線となっています。

このフェンスは全国の支援者から寄せられたリボンや横断幕でいっぱいです。石川からの寄せ書きも追加してきました。この黄色いリボンが風にゆれ、昼も夜も叫び続ける金網は、画家・相澤まり子さんが大きなキャンバスに描き、一〇月末に金沢で開か

花鳥風月

齢のせいか涙もろくなった。最近ではアニメ『ライオンキング』の二つの場面、すなわち父ムファサが掟を破った息子シンバをたしなめる場面と、シンバが自分の中に生きている父と自らの役割を認めて動物王国プライドランドに戻る決意をする場面は、何度見ても何かに突き動かされる。劇団四季の舞台も同様に素晴らしい▼一体何に感動するのか。畏敬の念か、矜持か、はたまたそれ以外の何かなのか。ただ言えることは軽薄な感情だけではないということだ▼「人間は感情のみに左右されずに思慮深く行動できる能力を持つ。高い理性・知性と結び合わさることで、より高い情操、つまり道徳的・芸術的・宗教的価値をそなえた複雑で高次なものへ到達しうるのが人間だ。実際、知性が高い人ほど表面ではなく内容に呼応するものだ▼今年の漢字は「絆」。家族や仲間などの身近でかけがえないものが見直された。自然界を支配するバランス、サークルオブライフは「絆」でもある。百獣の王ライオンはその頂点に立つ。その気品に学びつつ、越年を迎えたい。(ま)

れた「わいわいがや花野展」に展示され、心を動かされた現場です。フェンスの前での「非暴力」基地闘争について具志堅宜野湾市議からの話は確信に満ちていました。

緑豊かな新都心公園(二四年前に全面返還された米軍基地の跡地)で開かれた閉会集会で、現地代表は「県内移設では沖繩の未来も発展もありえない」とアピールしました。米軍基地の返還は雇用と税収を増やします。沖縄県議会議事事務局の試算でも経済波及効果は二・二倍です。世論調査で「日米安保条約の破棄」と「友好条約に改めるべき」は併せて六九%を占めています。沖縄に基地はいりません、戦争の拠点から平和の拠点への想いを新たにしました。

(非核・石川の会常任世話人)

* * *

県民ぐるみの基地撤去のたたかい

内藤晴一郎

今年の平和大会に石川県から一〇人が参加しました。例年の参加は、四〜五人でしたが、県民ぐるみで基地撤去のたたかいが広がっている沖縄で開催するので、参加者が増えたのだと思います。海外からの参加者もマーシャル諸島共和国、パラオ共和国、グワム、フィリピン、アメリカ(ハワイ)、韓国から一五名と過去最高の参加でした。

開会集会は、那覇市民会館で千人の参加で会場いっぱい一階席は満席で、私たちは二階席に行きました。



新都心公園の閉会集会にて石川県の参加者

主催者報告は千坂事務局長が一年間の到達点をふまえ、普天間基地撤去、辺野古に基地をつくらせず、高江ヘリパッド建設反対のたたかいを勝利させるために沖縄で開催したことを報告しました。参加者一人ひとりが沖縄の現実を知り、たたかいに触れ、その熱い気持ちを持ち帰り、全国で沖縄との連帯の輪を広げることが力強く訴えました。

沖縄の与那国島、八重山住民から、自衛隊配備反対のたたかいと、教科書採択の文科省の無法を訴えました。

米軍犯罪につき、遺族を守る会からは一月に軍属の運転で命を落とすことにもかわらず公務中として起訴されなかったことに納得せず検察庁に審査請求し、今日(二五日)地検が起訴の判断をしたと報告。会場から拍手が起きました。参加できない

母親の訴えが読み上げられ、思いが伝わり、胸が熱くなりました。

神奈川県からも米兵に妻が殴り殺されたことが話され、基地があるから犯罪が起きる、裁かない日本政府に徹底抗戦を訴えました。

福島県から震災・原発事故支援に感謝するとともに一万九千人の避難者が、故郷にいつ帰れるか、風評被害等の不安を訴えられました。

横須賀からは原子力空母の危険性が訴えられ、地元の高江からヤンバルの森を破壊するヘリパッド基地建設反対闘争の支援を、辺野古からは杭一本打たせないたたかいを報告し、勝利するまで共に闘うことを訴えました。

二日目の分科会は「核兵器も原発も原子力空母もゼロへ」の分科会に参加しました。原発に関心が集まり八〇人予定のところ一四〇人の参加で会場はあふれんばかりの人でした。

午前中は学習が中心でした。新原昭治さんは、原発が日本に導入された経過を明らかにし、核兵器廃絶運動の原点が「ノーモアヒロシマ・ナガサキ」であり、真相を広めることで真に被爆者を救うこととあり、核兵器廃止条約の国際世論をつくり上げることが重要であると話されました。

矢ヶ崎克馬さんは内部被ばくの危険性について解説し、国際防護機関や日本政府の年間一mSvは危険な基準で安全であるはずがないと強調しました。ウクライナでは一mSvは移住。基準を強くすると運転できなくなるので甘くしていると話されました。神奈川の佐々木さんから横須賀の実態が報告され、討論に入りました。福島からの現状報告は東電

の対応のひどさ、食べ物の安全、除染の不安などが話されました。各地から原発反対の運動や核兵器廃絶の署名活動が報告されました。私も石川の運動について発言しました。

閉会集会は、米軍から返還されてきた新都心の公園で風船と、基地反対のメッセージカードを参加者全員が掲げて開催されました。駆けつけて挨拶に立った稲嶺名護市長の話は辺野古へ米軍基地を断固として受け入れない思いが伝わりとても素晴らしかった。稲嶺さんは当初予定になく、集会前に急きよ実現したそうです。集会后公園からモノレールのおもろ駅までシユプレヒコールをしながらパレードをしました。

大会前の時間を利用し、普天間基地、沖縄国際大学のへり墜落事故の現場、嘉手納基地を訪れ、大会後に辺野古、高江に行き、現地で闘っている方の話をじかに聞くことができ、有意義でした。ヤンバルクイナやジュゴンの住む美しい自然を破壊するヘリパッド基地や、辺野古基地建設反対の思いがより強くなりました。

(原水爆禁止石川県協議会事務局長)

日本平和大会代表派遣募金のお礼

日本平和大会代表派遣募金は、一六人より四万四千円寄せられました。

十一月二五日から二七日まで沖縄県で開催された日本平和大会に尾西洋子常任世話人を派遣しました。皆さんから寄せられました派遣募金につき、心よりお礼申し上げます。

航空自衛隊小松基地のF15戦闘機

燃料タンク落下事故の

原因究明を

柴原 和美

一〇月七日午前八時四五分頃、航空自衛隊小松基地所属のF15戦闘機が、能美市山口町地内に左主翼下に装着してあった機外タンクの一部及び模擬ミサイルを落下させる事故を起こした。

機外燃料タンクとは

戦闘機の左右の翼の下や機体の下にパイロンという部品で吊り下げる燃料タンクで、長さ六・六m、直径〇・八m、重さ一五五kg(空の状態での)の物体。F15戦闘機には、主翼と胴体内に燃料タンクがあり約六千kgの燃料を搭載する。それ以外に機外タンクを最大で三個(約一八〇〇kg×三)装備することができる。

今回落下したのは、左右の翼と機体下部に装備してあった三個のタンクのうち、左主翼下に取り付けてあったもの。

落下物は民家や工場の近くに

落下した場所は、小松基地から北北東に約四kmの小松市との境界に近い能美市山口町地内で、県翠ヶ丘浄化センターや民家、工場があり、近くには北陸自動車道が走っている。落下物は、県翠ヶ丘浄化センター敷地内や近くの空き地等で発見されており、タンクの一部とみられる長さ約二m、直径約〇・七mの円錐状の大きな物体や一〇〜二〇cm角の破片などが見つかっている(写真は共同通信より転載)。

民家や工場から三〇m、高速道路から二〇〇〜三〇〇mのところでも落下物が見つかっている。

今回、人的な被害は無かったが、落下地点



機外燃料タンクの一部とみられる落下物

が少しずれ民家や工場、高速道路に落下していれば大惨事になりかねない重大な事故である。また、燃料は空であったと報道されているが、燃料が入った状態で落下していれば更に重大な事態になったと推測される。一九六九年二月八日金沢市泉二丁目に自衛隊戦闘機が墜落した事故（死亡四人、重軽傷者一人、全半焼二四戸）を彷彿させる。

重大なインシデントに該当

これだけ重大な事故であるにもかかわらず、国土交通省運輸安全委員会による調査が実施されていない。運輸安全委員会は航空機事故等の調査対象として①航空機の墜落、衝突又は火災 ②航空機による人の死傷又は物件の損壊 ③航空機内にある者の死亡（自然死等を除く）又は行方不明 ④航行中の航空機が損傷を受けた事態 ⑤重大インシデント（事故が発生するおそれがあると認められる事態）を掲げている。今回の落下事故は⑤重大なインシデントに該当すると考えられる。しかし、今回は当事者である航空自衛隊が事故原因の調査をおこなっており、徹底した原因究明がされるかが不安である。

一〇月二〇日の航空自衛隊による事故調査の間報告では、事故機本体に異常は見られず機外タンクに原因があった可能性が高いとし、一〇月三十一日には航空自衛隊の約一四〇機のF15戦闘機の特別点検でも燃料供給に係る電気、加圧系統の異常は見つからず、パイロット、整備員に対する事故再発

防止に必要な安全教育も完了したとして、小松基地以外の基地において機外タンクとパイロンを外した状態でF15戦闘機の飛行訓練を再開した。

航空自衛隊のトップである岩崎空幕長は一〇月二八日の会見で、「国防上、防空体制の維持、パイロットの技量維持などの面から一般練成訓練も我々の重要な任務。F15が配備された地域の皆さまに説明のうえ、理解を得ながら訓練を再開していきたい」と述べた。住民の安全よりも「国防」の方が大事だと言うのだ。

「想定外の事故」では済まされない

一二月二日、航空自衛隊は機外タンク落下事故の原因について、タンク内の電線がショートし気化した燃料に引火して爆発したと発表した。また、再発防止策として、機外タンクの定期点検や取り付け状況の確認、教育の徹底をあげた。原発事故もそうだが、まったく人のいないところを飛ぶのならまだしも、戦闘機は私たちの上を飛んでいるのであって「想定外の事故」では済まされない。構造的に問題がなかったのか等あらゆる点から原因究明がされるべきだし、点検や教育だけで安全が確保できるとは思えない。このような曖昧な原因究明や事故対策では到底納得できない。

（小松みなみ診療所事務長）

詩人会議かなざわ「独標」より

月よ

月よ

まんまるい今夜の月よ

ウサギがもちつきをしているのが見えるよ

月よ

まんまるい月よ

ボクらの住んでいる地球では

ジュゴンの海が汚されそうだよ

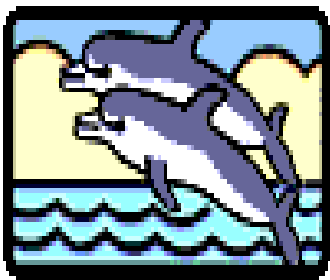
核兵器を使うウワサも流れているよ

月よ

まんまるい今夜の月よ

ボクらの住んでいる地球

どんなふうに見えるのかい



反核医師の会が小中学校に

「はだしのゲン」を寄贈

小野栄子

核戦争を防止する石川医師の会（医師の会）は、漫画『はだしのゲン』（全一〇巻）を金沢市内の小中学校一二校に寄贈し、二月五日、金沢市教育委員会から感謝状が授与されました。



学校医の西田直巳先生（中央）が高尾台中学校の正吉喜久夫校長（右）に「はだしのゲン」を寄贈しました

医師の会は今年六月から、「はだしのゲン」を県内の小中学校に寄贈する運動に取り組んでいます。被爆者が高齢化し、被爆の実相を知ることが難しく

なりつつあるなか、実際の被爆体験をもとに描かれた「はだしのゲン」は核廃絶運動を若い世代へとつなぐバトンの役割を担っています。「戦争はいやだ」「核兵器はいらない」という思いの原点が「はだしのゲン」である若者も少なくないはずです。

「はだしのゲン」の寄贈希望先を

金沢市教育委員会が調査

医師の会からの申入れにより、九月に金沢市教育委員会が市内小中学校対象に実施した調査では、小学校五九校・中学校二四校のうち、それぞれ四七校・一四校から寄贈希望が寄せられました（英語版

「BAREFOOT GEN」は中学校一八校が寄贈を希望）。授与式後に行われた懇談で浅香久美子教育長は、「はだしのゲンが生徒たちにこれほど読みこまれていることに正直驚いている」と話されましたが、私たちも予想をはるかに超える結果に嬉しい悲鳴をあげました。小学校の先生に話を聞くと、図書室では常に貸出中、しかもポロポロになるまで読み込まれているとのこと。一九七三年、「週刊少年ジャンプ」に連載されてから三八年が経ちますが、今なお、子どもたちに読み継がれていることを実感しました。

今回の寄贈運動が地元紙で紹介されたことで、寄贈を希望しないと回答した学校から「やっぱり寄贈してほしい」との電話が、他団体からは共同の提案が寄せられています。今後は、英語版が金沢市内すべての図書館・中学校に所蔵されることをめざし、「プロジェクト・ゲン」（「はだしのゲン」翻訳グループ）と協力して、金沢市と教育委員会に要望する

予定です。また、寄贈運動は引き続き他市町でも進めていきます。これまでに集まった運動募金は一五八、四八二円。多くの小中学校に届けるにはまだまだ募金が不足しています。ぜひ寄贈募金にご協力ください。

金沢市内小中学校への寄贈にあたっては玉野道金沢市会議員や森井書店（尾張町）に、趣旨に賛同とご協力をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

（核戦争を防止する石川医師の会事務局）



子どもたちに核被害の実相を伝え、核のない平和な世界への希望をつないでいくために、「はだしのゲン」を子どもたちに贈りませんか？寄贈募金にご協力ください。

【募金振込先】

郵便振替 〇〇七一〇・五・五八二三

「核戦争を防止する石川医師の会」

※通信欄に「はだしのゲン寄贈募金」と記入してください。

【事務局連絡先】

金沢市尾張町二丁目八番二三号

太陽生命金沢ビル八階

核戦争を防止する石川医師の会

電話〇七六―二二二―五三三七

(会員投稿)

雑誌『世界』——一月号

特集・再生可能エネルギーの読後記

中村昭一

思わずこの号の特集に惹きつけられた。核を含めた今後の地球の問題を考えていく上で、人の世界観の基盤となるものだからだ。

今回の特集は、「再生可能エネルギーの普及への条件」である。四本の論文、Q&Aが二本、対談が一本、インタビューが一本、ルポが一本の、計八本の原稿から構成されている。

全体を読了して改めて、冒頭の「近代世界の敗北と新しいエネルギー」（内山節・哲学者）という哲学的論考の大きさに気付かされる。最初に読んだ時は、内容に惹き込まれたのは勿論だが、最初にこれを置くことの意味がよく理解できなかった。しかし全体を振り返ると、この特集の冒頭にこの論考を配置することの大きさが理解できる。さすがに岩波の『世界』の特集だ。

この哲学的内容を端的に述べるのは容易ではないが、「わからなさ」という問題、近代世界は科学と経済の無限の発展を前提とする近代世界の「不正の内包」の問題、「専門性という権力」の問題、これらの指摘には目を見張らされる。そして近代の構造自体がもはや有効ではない時代、そして有効でなくなつた構造が、私たちの社会を破壊する時代の到来を予言している。私たちに問い直しの勇気を問う

ているのは、実に重い提起だ。

二番目に「再生可能エネルギー中心の社会は可能だ」ドイツの状況から見る日本の課題」（和田武・日本環境学会会長）の論考が配置されている。これは最近、再生可能エネルギーを飛躍的に拡大させているドイツと日本を比較しながら、日本における普及促進のための問題点や課題について述べている。再生エネルギーの可能性を根拠づけるものとなっており、論議の展開を促進させるものとなっている。

そして「Q&A・再生可能エネルギー」として各分野の専門家が質問に答えている。そのPART 1・質問編（まず知りたい7つのこと）では(1)「再生エネルギーで現在私たちが使っているだけの電力をまかなえますか？」として環境エネルギー政策研究所・飯田哲也氏が回答している。以下同様に、(2)「再生可能エネルギーのコストは高いのですか？」（飯田哲也氏）、(3)「発電電分離や電力の安定供給が大事だとよく聞きます。そのために何が必要ですか？」スマートグリッドとはどんなものですか？」（毎日新聞社・川口雅浩）、(4)「なぜ日本ではこれまで再生エネ導入が進まなかったのですか？」

（環境エネルギー政策研究所・田中信一郎）、(5)「再生可能エネルギーは、経済・産業を活性化できるのでしょうか？」（慶應大学・金子勝）、(6)「再生可能エネルギーが発展していくためには、どのような制度的・政策的な改善が必要ですか？」（田中信一郎）、(7)「CO2削減に、再生可能エネルギーは寄与するのでしょうか。再生可能エネルギーは寄与するのでしょうか。化石燃料に頼らざるを得ないのでしょ

うのでしょうか？」（北海道大学・吉田文和）。さらにPART2・エネルギー紹介編（現状と具体的な課題）では、(1)「風力」（足利工業大学学長・牛山泉）、(2)「小水力」（茨城大学）、(3)「海洋」（環境ジャーナリスト・やまさき恵史）、(4)「地熱」（やまさき恵史）、(5)「太陽光」（太陽光発電所ネットワーク・都紫健）、(6)「太陽熱」（やまさき恵史）、(7)「バイオマス」（筑波大学名誉教授・熊崎実）と続き、各テーマの最新の情報がまとめられている。

四番目に、再生可能エネルギーの普及の決め手ともいべき買取法について「検証・再生可能エネルギー買取法」（NPO法人気候ネットワーク代表・浅岡美恵）が説明している。その位置づけ、目的、対象エネルギー、調達価格、期間、義務規定、賦課金、特例などについて説明の後、再生エネルギー拡大に向けた買取に関わる課題について触れられ、(1)再生エネ拡大を実現できる買取条件の設定、(2)調達価格調整委員会の人選、(3)電気事業者の買取・接続義務の厳格化と広域利用、(4)総導入手量の拡大と賦課金抑制の要請、(5)電力自由化と発電電分離について言及している。

五番目に「脱原発・脱CO2のエネルギー政策を」（未来バンク事業組合理事長・田中優）の論考が載せられている。長年の原発運動の反省として「危機感に頼りすぎたこと」「身近な問題につなげられなかったこと」「仕組みの問題につなげられなかったこと」を挙げ、仕組みが原発を維持していると訴えている。国内経済に余分で不当な負担をかけつつ、電力会社は「送電線の独占」「総括原価方式」「金利」「広告宣伝費」「学術界への研究費」「政治家への圧

力」という仕組みを通じて、主要業界を支配し、周囲の業界を儲けさせることで自ら業界に君臨できる仕組みになっている。この構造を変えずして非核の展望は開けないと述べている。

六番目は「エネルギーシフトへアジアの共同を」というテーマで、前述の飯田哲也と韓国環境財団理事長のチェ・ヨル氏が対談している。

東日本大震災と原発事故は国際的にも大きな影響を与えているが、とりわけ隣国である韓国では、日本による汚染水の海洋投棄に強く反応した。対談では、韓国国内の老朽化したものを含めて稼働中の原発の問題、さらには原発輸出の問題など、日本と同様な問題を抱えていることについて熱く語られている。殊に一旦、今回のような規模の原発事故が起これば、放射能は国家の枠を超えていくのであるから、各国の原子力開発に関わる国家主義に拘泥せず、東アジアに共同の脱原発のネットワークの構築に向けての対話を求める姿は、傾聴に値する。

七番目の「脱原発へ、信用金庫にできること」(城南信用金庫理事長・吉原毅)というインタビューは、信用金庫では預金量第二位の大手の同金庫が四月一日にサイトに掲載したメッセージはその明確な脱原発の訴えで大きな反響を呼んだが、その後の対応や信用金庫の社会的役割について語られている。その原文は以下のとおりである。

『原発に頼らない安心できる社会へ 城南信用金庫』

東京電力福島第一発電所の事故は、我が国の未来に重大な影響を与えています。今回の事故を通じて、原子力エネルギーは、私達に明るい未来を与えてく

れるものではなく、一歩間違えば取り返しのつかない危険性を持つていること、さらに、残念ながらそれを管理する政府機関も企業体も、万全の体制をとっていないことが明確になりつつあります。

こうした中で、私達は、原子力エネルギーに依存することはあまりにも危険性が大き過ぎるということを学びました。私達が地域金融機関として、今できることはささやかではありますが、省電力、省エネルギー、そして代替エネルギーの開発利用に少しでも貢献することではないかと考えます。そのため、今後、私達は以下のような省電力と省エネルギーのための様々な取り組みに努めるとともに、金融を通じて地域の皆様の省電力、省エネルギーのための設備投資を積極的に支援、推進してまいります。(以下、項目略)

「原発と地域金融は相いれない」「コミュニティの基礎となる地域金融」という視点をもちつつ、信用金庫の本分から発したとされる運営姿勢には、一見して無関係に思える分野からの発信だけれども、貴重なものがある。

最後に、「地味で楽しい小水力発電く身近な水が地域を豊かに」(フォトジャーナリスト・古谷桂信)のルポが楽しい。日本の年間降水量は世界平均の二倍の一七〇mm以上であり、河川勾配はヨーロッパやアメリカ大陸とは比較にならないくらい急峻で、再生可能エネルギーの中で、水力は日本の気候風土に最適といえる。これまでエネルギーの創造に自分たちが参加することなど想像したこともない人たちだが、「自然エネルギー資源は自分たちの宝だ」と気付き、国や既存電力会社が中央集権的な大規模開

発をして地方を棄ててきたことに抗し、高齢化や人口流出で疲弊した第一次産業を基盤とした地域に資金と人が流れ、豊かに再生する可能性を探り当てるのは実に痛快だ。

* * *

今回の特集は、観念的な再生可能エネルギー推進論に止まらず、論拠をもってこれを推進するための基盤となりうる。そしてこれと本来は別問題ではあれ、同時にぜひとも非核の世界を展望したい。私たちはこの特集の知恵を共有したいものである。

(非核・石川の会員)

絵手紙コーナー

金沢医療生活協同組合絵手紙班 田伏久子



「和定例会報」より

宿題「騙す」

前田大峰 選

佳作

TPP熟慮と偽りお膳立て

啓

玄海はヤラセと騙しで再開し

茂明

国益を騙しの美化に都合よく

迷天使

この泥鰌二枚も舌をもっていた

一杜

人位

除染費用怖くて計れずたぶらかす

啓

地位

開国だTPPの猫だまし

一杜

天位

いつだつてお供を騙すトモダチで

林

軸吟

騙された原発に命削られる

* * *

（前号訂正）

宿題「無視」中「自給率無視でTPPへの秋波」は迷天使氏の作でした。

《非核平和・行事予定》

・二月二五日(月)～二六日(月)：日本生活教育連盟石川サークル・第四七回石川冬の集会・特別講演「フクシマに生き、フクシマを生きる―原発被害と言葉の力」講師 和合亮一(福島市在住詩人・高校教師)・ホテル森本(片山津温泉)

- ・二月二六日(月)：小松爆音訴訟公判・金沢地裁
- ・一月一日(日)一〇時～：元旦署名・尾山神社前
- ・一月六日(金)一二時半～一三時：六・九行動・武蔵エムザ前

- ・一月二九日(日)北陸原水協学校3 富山市内(講師未定)
- ・二月二日(月)一三時～一六時：「税と社会保障一体改革」に関する学習・討論集会(講師：浦野広明立正大学客員教授、横山寿一金沢大学教授)・労済会館ホール/消費税廃止石川県各界連絡会&石川県社会保障推進協議会共催

- ・二月一九日(日)一〇時～正午：石川県保険医協会第三八回総会記念講演「放射線の健康障害―内部被曝について考える」講師：矢ヶ崎克馬琉球大学名誉教授・ホテル金沢

- ・二月二八日(火)：三・一ビギンデー国際交流フォーラム・海外代表歓迎レセプション・静岡市グランシップ
- ・二月二九日(水)：日本原水協全国集会・全体会・分科会・静岡市グランシップ

- ・三月一日(木)：三・一ビギンデー墓参行進、三・一ビギンデー集会・焼津文化センター
- ・三月三日(土)午後：わらび座六〇周年記念公演「アテルイ 北の耀星」・金沢文化ホール・わらび座「アテルイ」を楽しむ会TEL〇九〇・六二七三・四一四

- ・三月二三日(金)一四時と一八時一五分：前進座公演「水沢の一夜―高野長英」毛抜・邦楽ホール・前進座を観る会

- ・六月一〇日(日)一四時～一六時：核戦争を防止する石川医師の会第二五回総会記念事業「ナターシャ・グ

ジーコンサート&被爆証言を聴く会・石川県教育会館ホール

- ・六月一七日(日)一四時～一六時：カンタータ「悪魔の飽食」第二三回全国縦断コンサート石川公演と森村誠一×池辺晋一郎両氏のトーク・主催/石川公演実行委員会・県立音楽堂コンサートホール

《編集後記》

非核石川の会が設立されて満二二年を迎えることとなった昨年二月より、会報『非核・いしかわ』が編集委員会(現在五名)体制に移行して一周年。この間発行された会報は、新春の一五〇号から現在の六一号となりました。

今号は、「日本平和大会イン沖縄」の尾西報告・内藤報告に続いて、F15戦闘機「燃料タンク落下事故」最新情報の柴原報告、会員投稿「雑誌『世界』一月号―読後記」、『はだしのゲン』寄贈運動の小野報告などの他、前回から引き続き「和定例会報」、「絵手紙」にくわえ、今回から「詩」のコーナーが(初登場は山口修治さん)新設されました。本会の設立趣意書(一九八八年八月一〇日)にもあるように、「この運動の発展の上に非核の政府の実現をめざすことは、日本国民の悲願であり国際的責務」です。

いよいよ激動の新時代を迎えるにあたり、編集委員会より会員諸氏の積極的なご提言・ご寄稿をお願いし、「非核・いしかわ」の新しい前進にむけ、お元気で新春をお迎えのことをお祈り申し上げます。

(一)